

—◆—演奏会情報—◆—

2012. 9. 28 (金) 大阪交響楽団第 169 回定期演奏会

(会 場) 大阪 ザ・シンフォニーホール

(曲 目) [1] ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト ピアノ協奏曲第 25 番 ※
[2] アントン・ブルックナー 交響曲第 0 番 (ノヴァーク版)

(指 揮) 児玉 宏

(管弦楽) 大阪交響楽団

※ (ピアノ) 田部 京子

—◆—鑑賞記—◆—

[1] ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト ピアノ協奏曲第 25 番

ピアニスト・田部京子氏は、デビューして 20 年というベテラン。わたしは、ナマで聴くのは初めてだが、実は CD を持っている。透き通ったピアノの音がとても好きで良く聴いていた。その田部氏が出演するとあり、とても楽しみにしていた。

CD 以上に、素晴らしく透き通る透明性の高い音は、このモーツァルトの曲にマッチしていて、会場にいる他の聴衆も皆、その音色を聴き入り浸っている感じだった。優しく柔らかな音が会場を包み、ストーンと心に入ってくる。もうひと回り小さなホールで、ピアノだけの演奏を楽しんでみたいと思うくらいだ。

曲そのものは、モーツァルトらしい作品というのだろうか、とても聴き心地の良い作品だ。

勝手に楽章ごとにタイトルをつけるとしたら、

- ・ 第 1 楽章 Der Spiegel (遊び)
- ・ 第 2 楽章 Der Fluß (小川にて)
- ・ 第 3 楽章 Der Schloß (お城にて)

といった感じだろうか。とくに、第 2 楽章は、ザルツブルク市内を流れるザルツァッハ川の水面に映る朝日を眺めているようなそんな情景が思い浮かぶ。素敵な音符が、素敵なメロディーを作っている。まさにそんな印象を受けた。

[2] アンTON・ブルックナー 交響曲第0番（ノヴァーク版）

今夜のメインディッシュ。ブルックナーの交響曲である。これは、大阪交響楽団の音楽監督である児玉宏氏が、年に一度、ブルックナーの交響曲を取り上げ、全曲を演奏するという企画だ。今回は、その7回目となる。そして、今回演奏されたのは、交響曲第0番。

「えっ？0番？」

そう思われた方も多いのではないだろうか。

これは、とても繊細だったブルックナーの性格ゆえともいえるかもしれない。ブルックナーは、演奏する度、その批判を受け、作品に手を加えてたことで有名で、作品ごとにたくさんの「版」があり、どれがブルックナーの最終意志の作品であるか分からないことが多い。

この交響曲第0番は、実は、初演といより試演した段階で、ブルックナーは作品外としたということから、「第0番」とされている。実際は、「第2番」としたかったらしい。作曲されたのは、1869年というから、今からおよそ150年も前。あまりに哲学すぎるブルックナーの曲は、当時は、なかなか受け入れられなかったのかもしれない。

確かに、今、わたしたちが聴いても難解さが付きまとうことは否めない。

しかし、わたしは単純にこの曲は、「良い曲だな」と思った。もちろん、児玉宏氏のブルックナー作品への思い、そして造詣の深さが、そう聴こえる演奏を作り上げたことが大きな要因であることは間違いないが、とても素晴らしい演奏だったと思う。

曲紹介に終始してしまったが、今日の演奏を聴き、児玉宏氏がブルックナー演奏における重要な職責をになっていくであろうという確信をわたしは得た。それほど、充実した演奏だったことをここに記しておきたい。